

高等学校国語科におけるグループワークの活性化についての研究

～プレイフルラーニングによる生徒の意識と対話の変容を通して～

横浜国立大学教育学研究科 高度教職実践専攻

大橋 司

1、学校の現状と課題

研究校であるT高校の生徒は授業内外に問わず生徒同士の会話も多く行われており、研究生の自分に対しても分け隔てなく声をかけてくれる。ここから、他人とコミュニケーションを行うことに苦手意識は無いように感じる。しかし、これまでの授業実践の中ではグループワークで議論が活性化せずに終わることが多かった。生徒に対して聴き取りを行なったところ、「中学時代のグループワークで他の生徒に自分の意見を否定された経験があり、そこから自分の意見に苦手意識を持っている」、「中学時代はグループをまとめてくれる人がいたが、現在は議論をどこに向かえば良いのか分からない。」という意見を抽出することができた。

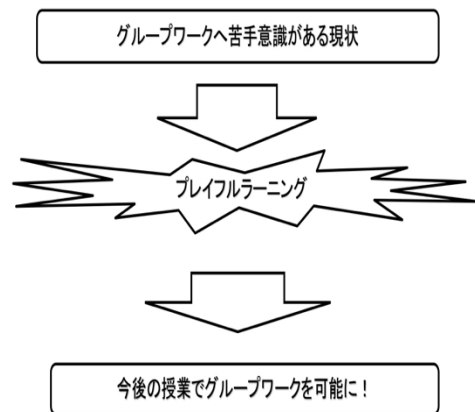
2、本研究の目的と方法

研究の目的はT高校の授業におけるグループワークの活性化を目指すことだ。平成20年度の学習指導要領改訂では児童、生徒の「思考力・判断力・表現力等」の育成を目指し、様々な教科で言語活動の充実を目指すとして記されている。また、新しく告示された学習指導要領（高等学校は平成30年告示）でもこの「思考力・判断力・表現力等」は身に付けるべき資質・能力の3本の柱のうちの1つとして示されおり、国語科のみならず、様々な教科における言語活動についても引き続き重要事項として挙げられる。その中でグループワークも中央教育審議会答申（平成20年）が示している「各教科で行うべき言語活動」で6項目に整理されている部分の1つ（⑥互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる）として示されている。

グループワークの活性化についての具体的な手段として、授業実践において上田、中原（2011）のプレイフルラーニングの視点を導入し、グループワークへの苦手意識を払拭する。また活動中にグループワークで学習することの意義を生徒が見つけ出すことにより、発展的な学

習でもグループワークによって学習を深められるステップとなる効果を期待している。

3、評価方法



① 「生徒へのアンケート調査」

授業実践を行うクラスでプレイフルラーニングの導入前と導入後で生徒にアンケートを取る。そこでグループワークに対する意識の変容を数値で評価する。

② 「グループワークにおける発話分析」

プレイフルラーニングの導入前に行ったグループワークと導入後に行ったグループワークをレコーダーで記録し、生徒の発話の変容を調査する。

4、参考文献

- ・文部科学省（2018）『高等学校学習指導要領 総則編』
- ・中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）—5. 学習指導要領改訂の基本的な考え方—」（2008年1月17日）
- ・上田信之、中原淳（2011）『プレイフルラーニング；ワークショップの源流と学びの未来』、三省堂

2枚目以降はこの書式 25字×42行×2段